園長コラム～みんなが笑顔になれる保育園への道～　2025 年 4 月号

ガラスとダイヤモンドの違い

●前回のお便りで全柔連の田中先生から教わった「疾風に勁草を知る」（訳：強い風が吹いた時、本当に強い草が分かる）という言葉に触れ、ザ・リッツカールトン日本支社の元支社長高野登さんから直接お聞きしたエピソードを思い出したと書きました。今月号はまずそこから入っていきたいと思います。

●エピソードの舞台は 2008年、リーマンショックの 2 か月後の 11 月のことです。同ショックの世界的な影響はホテル業界もまた例外ではなく、宿泊客の激減により軒並み大打撃を受けていました。経営不安の暗雲が立ち込める中、フロリダにあるリッツ・カールトン・ホテルに集められた世界各国の支社長たちを前に、当時のCEOサイモン・クーパー氏はこう語ったそうです。

●「まさかこんなことが起こるとは、だれも想像していなかっただろう。もちろん、私もだ。厳しい試練だが、こういう時代を体験できるのは、むしろ貴重なことかもしれない。私はいろいろな船乗りを知っているが、穏やかな海で優秀な船乗りが育つのを見たことがない。みな、荒波を乗り越えてきている。嵐を乗り切ってきている。そのなかで、腕を磨いてきている。」

　こうした厳しい試練を好機と捉えられるマインドこそ、疾風の中でしなやかに風を受け流す強い草木を彷彿とさせます。

また優秀な船乗りの具体例を示すあたりも、決して気休めで言っているのではない、サイモン氏の本気度を感じさせます。同氏の言葉はさらに続きます。

●「皆さんはガラスとダイヤモンドの違いが分かるだろうか。薄暗い部屋に飾られている状態では、その輝きには大した差もなく、どちらも綺麗にカットされていたら、なおさらどちらが本物のダイヤモンドか見分けがつかないかもしれない。しかし、両者を外に持ち出し日光に晒せば、ダイヤモンドはガラスとはまるで比べ物にならないほどまばゆい輝きを放つ。また、仮に両者に強い圧力が加われば、ガラスの方は粉々に砕け散ってもダイヤモンドの方はそのままの形を維持し続けるだろう。皆さん、どうか安心してほしい。リッツ・カールトン・ホテルはダイヤモンドのホテルだ。危機に直面してこそダイヤモンドとガラスの違いは際立つ。今こそわれわれがダイヤモンドのホテルとしての真価を世の中に証明する絶好のチャンス、そう思わないだろうか。」

　この言葉を聞いた各国の支社長たちは皆一様に奮い立ち、目の前にある未曾有の困難に立ち向かう勇気を持って帰国の途についたそうです。

●実際、当時世界中のホテルが廃業や経営統合を余儀なくされ赤字続きだったところ、リッツ・カールトングループは日本国内でも断トツトップの営業実績を残しています。大躍進の影にはこうした経営トップからの激励と明るく前向きな見

通しの提示があったことが伺い知れるエピソードです。

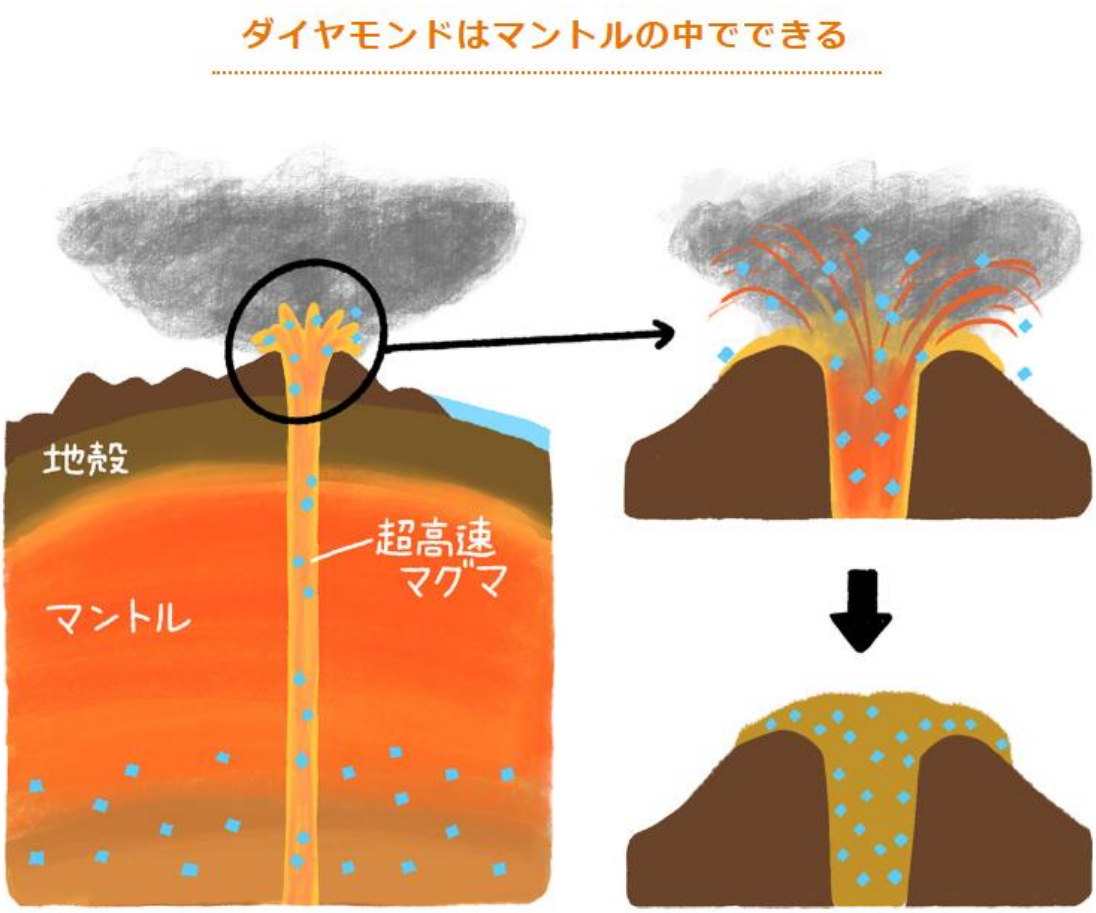
●困難や危機に直面した時、その人や組織の真価が現れる――。田中先生と高野登さんお二人の話の共通点です。ではこれを保育に当てはめた時に、子どもたちにとっての「真価」とは何でしょうか。それは、これまでお便りで書かせていただいたセルフエフィカシー（自己効力感。2024年6月号）やレジリエンス（立ち直る力。2024年12月号）、グリット（やり抜く力。2025年1月号）といった、いずれも非認知能力がこれに該当することは間違いないでしょう。しかし、こうした力が顕著に育ち始めるよりももっと早い段階で、乳幼児期のうちから身に付けておくべき能力、そしてそういった能力が育まれる環境とはどういったものか…。私の思考がそこまで進んでいった時に、ふと、そもそもダイヤモンドはなぜあんなに固くて、そしてあんなにキラキラと輝くのだろうか？無性に調べてみたくなりました。

●調べてみたところ、ダイヤモンドの固さと輝きの秘密は、その生成過程と、それゆえの光の屈折率の高さにありました。「光の屈折率」とは（中学の時にかすかに学んだ記憶があります…）「光が物体の中を通る時の速度の遅さ」を表します。ダイヤモンドはMinecraft（ビデオゲーム）でダイヤモンド採掘を行ったことがある方はイメージを持ちやすいと思いますが、地中奥深くのマントルの中で生成された、地表上では非常に珍しい物質です。噴火の際、地中から溶岩と一緒に一気に噴

き上げられたことで地表近くでも見つかるのだそうです。



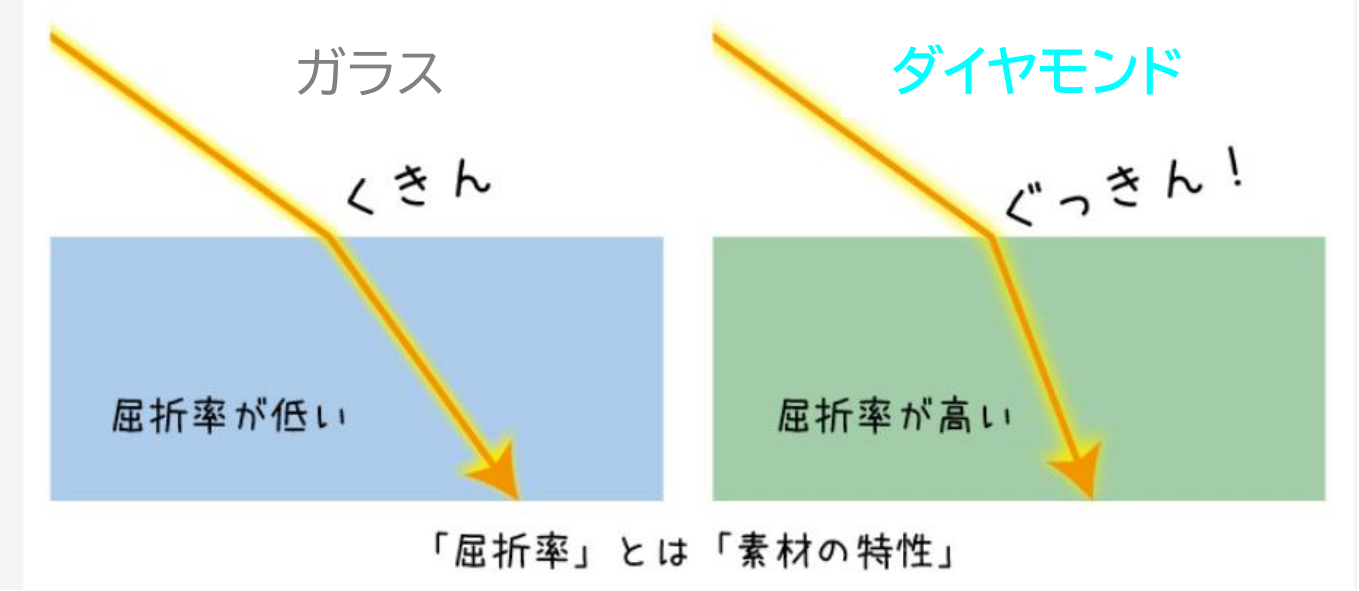
Minecraft 画面 地中深くのマグマとダイヤモンド鉱石



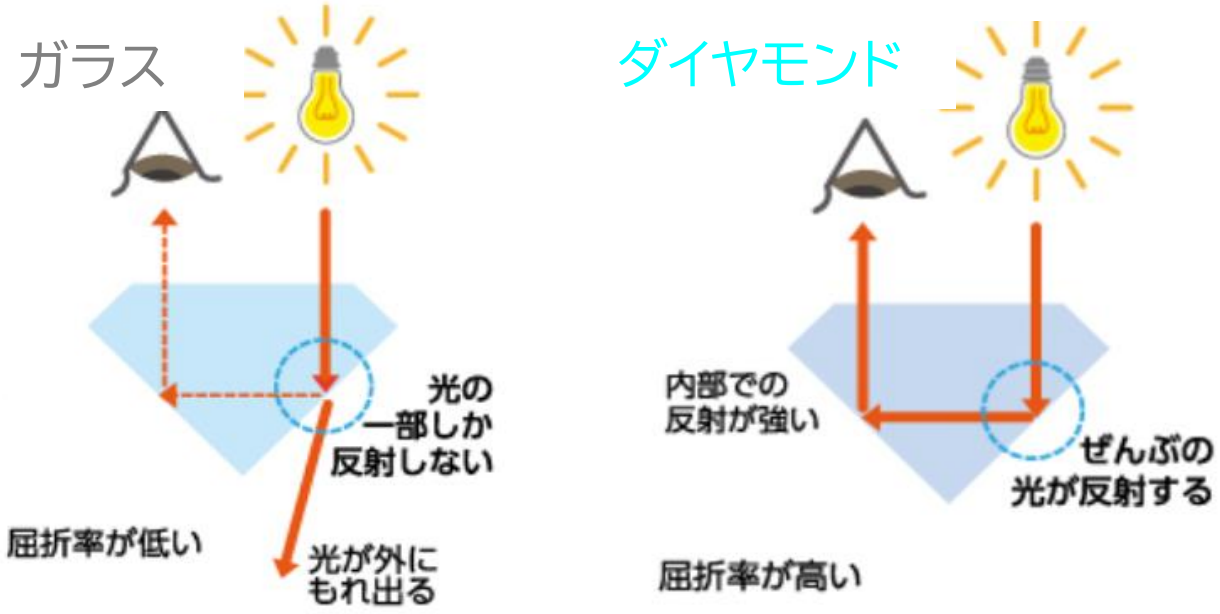
（引用元 Honda Kids）https://www.honda.co.jp/kids/explore/jewelry/

地球の中心にあるマントルは非常に圧力の高い空間のため、そこで生成されるダイヤモンドもぎゅうぎゅうに中味が

詰まっています。それで、空気中からダイヤモンドに光が差し込んだ瞬間、その密度の大きさにより光の進むスピードは弱められ、大きく折れ曲がります（これを屈折率が高いと言います）。



　また、ダイヤモンドの中に大きく折れ曲がって入り込んだ光がダイヤモンド内部の他の壁面にぶつかる際にまた大きく折れ曲がることから、光が石の中で複雑に何度も反射し続ける。その結果、人間の目にはたくさんの光が届きキラキラして見えるのだそうです。



（引用元キャノンサイエンスラボ・キッズ）https://global.canon/ja/technology/kids/mystery/m_01_16.html

●要するに、同じ光を受けたとしても、ガラスとダイヤモンドとでは、その圧倒的な密度の違いにより、光を内部に取り込む量と内部での反射回数に大きな違いが生じ、輝きに差が生まれるということです。
●私はこのメカニズムを人間の能力に置き換えて考えてみた時に、物質の光の屈折率とは、人間の心の感受性の高さと言い換えることができるのではないかと思いました。同じ情報や事実に触れても、その情報から何を感じ何を学び、結果どう行動するかは人によって千差万別です。感受性の高い人はそうでない人に比べ、情報を自分なりに咀嚼し、考察し、答えがない問題に対しても仮説に基づき未来を予測しながらいち早く行動に移すことができます。AIや VUCA(ブーカ)の時代と言われる今ほど人の感受性の高さが求められたことはないと感じています。なぜなら感受性は情報収集能力や未知の課題を自分の頭で考える能力の起点となるアンテナのような働きを有するからです。

●では、乳幼児期の段階から高い感受性を育む環境とはどのようなものなのでしょうか。その問いを考える際、先のダイヤモンドの性質(高い屈折率と密度の大きさ)がヒントになると考えます。すなわち、子どもから発せられる「なんで？」「どうして？」といった疑問や「みて！」「わかった！」という閃きを取りこぼさず、保育者が「ホントだね。」「不思議だね。」「よく気づいたね。」「へえ！おもしろいね。」といった応答的な関

わりでじっくりと拾い上げる人的な環境、また、こうした子どもからの自発的な発信がたくさん生じるような、ダイヤモンドならその輝きを最も引き出すブリリアントカットのように多面的な物的環境をたくさん用意すること。こういった密度の濃い環境が大切なのではないかと考えています。

ブリリアントカット



●さらに、日常的に発達や年齢がちょっと年上の子どもがいる異年齢集団の中で生活と遊び（異年齢保育）を繰り返すことで、子どもが自身の課題解決の糸口を特定の大人だけに頼らない、周囲の子どもの振舞いから獲得できる環境（見て真似て学べる環境）もまた重要だと考えています。これはいわば、感受性のアンテナを保育者一方向ではなく四方八方に広げることに繋がるからです。

●今年度もダイヤモンドの原石に接するつもりで、一人ひとりのお子様の興味と発達に合った密度の濃い保育園生活をご用意できるよう努力してまいります。引き続きご理解とご協力をお願いいたします。

園長　橋本　英明